

かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお
かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお
かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお
かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお
かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお かきお

柿生文化

平成20年12月18日
川崎市立柿生中学校
郷土史料館情報・研究誌
第5号

柿生中学校の文化活動を振り返り、更なる発展を期す

校長 板倉 敏郎

平成20年も残すところ後わずかになりました。柿生中学校は、校舎改築にあたり8月には、懐かしい旧校舎を後に、今のプレハブ校舎に移りました。

そして、同窓会の皆さんが8月23日に「校舎お別れの会」を開催し、多くの同窓生が参会された姿は、まさに61年の伝統を培ってきた柿生中学校ならではの事と大変感動いたしました。1万2000名以上の卒業生を送り出してきた柿生中学校の底力ここにありという感がいたしました。校舎は既に壊され、今では更地となってしまいましたが、その空間に、これからできるであろう新校舎の姿をいつも思い浮べております。



新校舎に併設される予定であります特別活動室を利用した「郷土史料館」の方も準備は着々と進められております。現在、歴史資料も数多く収集され、当誌の「郷土史料館収蔵品紹介」の中で毎月紹介させていただいております。また、今年より「特別活動室(郷土資料館)活用委員会」が設立され、社会科の教員が中心となり、収集された歴史資料を活用して展開する授業の指導案の検討も進んでおります。

一方、郷土資料館開設後のもうひとつの文化的事業として、「カルチャーセミナー」があります。現在、地域研究講座・一般教養講座・体験的活動講座の3つに別れております。地域研究講座は毎回すばらしい講師の方々をお招きし、すでに9回実施しており地域の皆様からご好評を得ております。一般教養講座は、12月22日に柿中ミュージックサロンと題しまして川崎市アートセンターで「クラシカルサクソフォンの夕べ」を開催いたします。

今後の課題といたしましては、柿生地域の歴史資料が必要となっております。今まで収集された歴史資料は、柿生以外の地域のもので、確かに歴史的には、かなり重要なものではあります。何と云っても柿生地域の地元資料にはかないません。何卒、各ご家庭で、本校に寄贈できる歴史資料がございましたらご寄贈いただきたいと存じます。なお、保管・管理・運営等につきましては、最善を尽くして行なう予定でおります。是非ともご安心してお預けいただければ幸いです。



旧校舎解体後の更地

郷土史料館は、何と申しまして地域の皆様のご支援がなければなかなか実現いたしません。何卒ご支援のほどよろしくお願いいたします。

平成21年が良き年でありますようお祈り申し上げます。来年もよろしくお願い申し上げます。

シリーズ「麻生のルーツを探る」— 第4話—

「低地におりる麻生の文化」

長野県の八ヶ岳に川崎市少年自然の家があるのをご存じと思います。そこから車で約15分「尖石(とがいし)縄文考古館」というものがあります。訪れて驚いたのですが、豪華な土器・石器が陳列され、国宝とされているものもありました。ここは、海拔1070メートルの台地で、周囲の遺跡は、国の特別史跡に指定されております。何でこんなところに?と思ったのですが多摩丘陵の黒川、万福寺等の遺跡も、何かこれに似通ったものを感じます。

麻生周辺の遺跡調査の資料を見ますと遺跡の数は、縄文前期、中期が最も多いことがわかります。それは、地球最後の氷河期の終焉で、温暖化が氷を溶かし海面が上昇、古鶴見川へも海水が流れ込み、気候が温暖化し、山の幸に加え海の幸も得られた快適な時期だったからと言われており、隣の宮前区鷺沼遺跡の住居跡からは、「びく」を型どった貯蔵穴、石の錘(おもり)と精巧な軽石の「浮き」が発見されています。

それでは、古鶴見川の海進(海水位が上がり、陸地の奥まで海岸線が進むこと)はどの位の所まで進んでいたのでしょうか。麻生川の水位が上がったことは確実で、前述した麻生水処理センターの白根耕地は海拔33メートルですから、小さな湖沼ではなかったのでしょうか。そうすると、当時の麻生の縄文人は、大木を石斧で削り、丸木舟を浮かべて魚釣りをしたのではないのでしょうか。そうしてみると、世間を騒がせた麻生水処理センターから発見された埋没樹の中には丸太舟もあったのでは?と想像されてまいります。麻生の縄文時代が抱える永久のロマンでしょう。

しかし、麻生周辺の縄文遺跡は、このころ(5000年前)をピークに減少していきます。そして、後期(3000年前)には、ほとんどその姿を消してしまいます。

その理由は、気象の変化、海面の後退もありましょうが、弥生時代を代表する稲作の進出でした。縄文人の狭い谷間での稲作では、金属を使う弥生人には抗すべきもなかったのでしょうか。

弥生時代(BC300~AD300年)といえ、大和朝廷誕生の頃です。日本史で学んだ日本武尊(やまとたけるのみこと)のご東征は、大陸から新しい文化を取り入れた

弥生人が縄文人の東国へ侵攻する象徴だったのではないのでしょうか。稲作を満たす条件は、恵まれた水利と広い耕地です。多摩丘陵の山に起きた麻生の文化は、やがて、八ヶ岳と同じように低地に下りてまいります。



文:元市議会議長・麻生観光協会会長・柿の実幼稚園理事長
小島 一也 氏

参考資料:「ふるさとを語る」「くろかわ」「有馬村のこと」
(持田春吉 氏)

「ミカリ婆さん考」

昔、柿生にあった
伝承を探る

— 伝説に隠された意味は何か? —

「柿生文化」第4号に「ミカリ婆さん」の話を載せましたが何人かの地域の方からも、この伝説を知っているというお便りをいただきました。

「ミカリ婆さん」は神奈川県の一部と東京都の多摩地方に分布していますが、角田益信氏の著「川崎の民俗」には川崎市の広い地域にわたった調査が報告されていますが、それによりますと同じ川崎市内においても「厄害」を及ぼすとの伝承が多い中、逆に「物を大切にする人(軒子)」や「落穂を拾ってくれる(禰)」「子供を火から守る(生田)(大嶋彦氏編「コト八日」より)」などと良いイメージをもつ伝承もいくつかあるようです。どうもこの「ミカリ婆さん」伝承には、いくつかの要素が複合的に絡み合っているような感じがしてなりません。

「ミカリ婆さん」が登場する12月8日と2月8日は、全国的に「コト八日」と言っており、この二つの日の間は、物忌み(ある期間飲食などを慎み身体を清めたり、その期間を不吉として仕事などをさけること)としており、特に東日本では、この二つの日には妖怪が出没するとされています。関東地方では目籠を掲げ、にんにく・柊(ひらぎ)と一緒につるすところが多いようです。同時に一つ目小僧の伝説も多く見られます。

神奈川県のア野市三屋では「大寒小寒、山から小僧がとんできた」という童謡の「小僧」は一つ目小僧のことだと言っています。大磯町国府では、「朝鮮から」といって「唐土の鳥」が流行り病もたらすという内容を歌詞にした「七草囃子」もあります。西日本の多くの地域では、「コト八日」の日に「八日吹き」と言ってお風が吹き何か得体の知れない物がやってくるという伝説があります。これらの「風」との関係は、現代のインフルエンザの流行を彷彿とさせられます。もしかしたら、12月から2月までの間は、現代では毎年、インフルエンザが大流行します。そして、多くの死者もだしていますが、昔もインフルエンザが流行したことと思われませんが、今のようにウイルスなどが原因であるなんてことは到底分かりません、きつともっと沢山の死者をだしたのではないかと考えられます。ですからきっと悪い妖怪のせいではないかと深刻に考えるのも仕方ないことではなかったかと思われま。

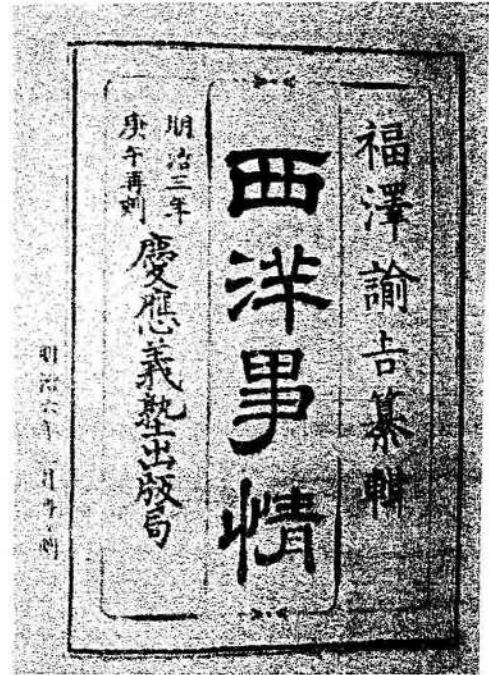
さて、「ミカリ婆さん」に関する疑問はまだ沢山あります。なぜ「一つ目」なのか、「一つ目小僧」との関係は次回に考えてみたいと思います。



上：「化物小遣帳」(黄表紙・寛政8年・十返舎一九 作)に登場する一つ目小僧 ↑
右：「化物箱根先」(黄表紙・安永7年・鳥居清長 画)に登場する一つ目小僧 →

郷土史料館収蔵品紹介

「西洋事情」 著：福沢諭吉



福沢諭吉の著作で幕府の遣外使節団に3回随行した時、実際に見聞した西欧の知識と書物により西欧諸国の諸制度を紹介したもので、慶応2年(1866年)から明治3年(1870年)にかけて出版された。

内容は、ヨーロッパ諸国の文物・制度の説明とアメリカ・オランダ・イギリスの歴史・政治・経済・陸海軍など、幅広く論じられている。日本の近代化に貢献した。

当時、この書物は、約25万部売れたといわれ、福沢諭吉の評価を高めるきっかけともなった。

郷土史料館「史料」の寄贈・寄託のお願い

現在、柿生・岡上に関する歴史的史料を探しています。ご自宅で保存されている史料(古文書や道具類)でお譲りいただけるものや、一時、お貸しいただけるものがございましたらお知らせください。よろしく願いいたします。

柿生中ミュージックサロン

「クラシカルサクソフォンの夕べ」へのお誘い

— 演奏：丸山胤幸とその門弟たち —

◎期日 平成20年12月22日(月)午後6時30分より(約1時間)

◎会場 川崎市アートセンター(新百合ヶ丘駅下車徒歩4分) ◎入場無料